

あなたの心のスイッチ、押しちゃいます。



みの～れ10歳記念事業
「みの～れ物語制作委員会」編集長

福島 ヤヨヒさん

「夢や想いが実現できる場所、それがみの～れ」と語る福島さん。

みの～れと共に生活するスタイル

Minole Life
のすすめ

No.64

さわやかな秋風が感じられるようになりましたが、小さな秋を見つけた事ができましたか？一面に広がる真っ白な蕎麦の花、白やピンクで染まるコスモス畑。金木犀の花が咲くとキノコ狩りのシーズンを迎えるそつです。まもなく10歳の誕生日を迎える「みの～れ」では、みの～れ物語制作委員会を立ち上げ、「まちづくり編集会議」住民主導の文化センターにつどう人たちの物語」という本を出版することになりました。今回は、その編集長を務め、みの～れと共に歩み続けている福島ヤヨヒさん取材する。

あなたもこれで スイッチオン

「みの～れの『』が意味する、山あり・谷ありの10年間を一冊の本として残しておきたかったの。写真や映像で残しておくことは簡単だけれど本は簡単ではない。だからこそ！という強い希望があった。みの～れ10歳の企画を出してほしいと言われたときに、すぐさまこの企画を提案した。けれども、自分かやるって言った方がいいが、最初はどんな内容にしたらいいか分からなかった。『本の内容には、記録編と物語編があるからいいな』『こんな本があるから参考にしてみよう！』『こんな風にしたらいいいよ』というような話し合いがみの～れ物語制作委員会のなかで何度も行われた。編集長を引き受けることは私の使命だと思っただけで、今しかできない！と自ら奮い立たせた」と、みの～れ誕生前の7年と誕生してから10年で、足かけ17年という歳月をみの～れのために陰日向になりながら我が子のように優しく見守り、時には叱咤激励したこともある福島さんの笑顔が印象的だ。

「まだ完成本が出来てきたわけじゃないけど、本にいい本ができた」と確信している。そう思えた理由は、制作委員の野手利江さんが『これを読んでみて下さい』と物語の原稿を渡してくれてね。出張で茨城空港から神戸に向かう飛行機の中で読み始めたの。1時間で読み切れなかった。みの～れに足しげく通った人たちを書いた原稿は本当に素晴らしいものだった。本の～れに集う一人一人がこれだけたくさんのことをしている。改めてみの～れはすごい場所だなと思っただけで、企画したことやらせてもらえらるし、少しずつ進化させながら、自分たちで発想していかなくてはならない。職員が一生懸命やってくれて、毎日をお陰だと思っ福島さんに「ゆっくり寝る時間はあるんですか？」と聞かずにはいられない。かかった。あるわよ。パソコンでオンラインゲームをやるのが楽しみなの。こんなお茶目な一面も垣間見ることができた。小美玉市公共ホール運営委員、四季文化館企画実行委員、みの～れ支援隊長、なつかしの名画座実行委員、コーラスグループ『エーデルワイス』での活動等々、福島さんの活躍の場所は書ききれない。編集会議が繰り返される中で、

福島さんお手製のお弁当を何度も編集委員に振舞ってくれた。旬の食材を取り入れたおふくろの味。色鮮やかなばらばらずしは、本づくりのコーディネート。本づくりの佐藤修さんがフェイスタックで紹介したほどの絶品だった。

「まちづくり編集会議」住民主導の文化センターにつどう人たちの物語」と名づけられた本は、みの～れで輝いてきた人たちが書き上げたところがないさんからも削るところがないと言われたくらい、すばらしい仕上がりになりました。「いい意味で内容が濃いです。野手さんをはじめ制作委員全員に感謝です。ね。制作期間中は制作委員一人一人が輝いていました。12時間かけて校正を含めた編集会議を終えたときは『やったあ』と思うと同時にすごい本が出来ると同時に思いましたね」と笑顔で話す福島さん。本は11月3日午後1時30分よりみの～れで発売になります。思わず笑ってしまおう楽しい本を、ぜひみの～れでお買い求めください。福島さんの楽しいお話の続きは本の中に満載です。

(藤田 佐知子)